

令和6年4月8日

関係機関・団体の長 様

新潟県病虫害防除所長

令和6年度新潟県病虫害発生予察情報・特殊報第1号について（送付）
（モモ胴枯細菌病の初確認）

このことについて、別紙のとおり発表したので、業務の参考にしてください。

【問い合わせ先】

新潟県病虫害防除所

電話：0258-35-0867、FAX：0258-35-7445

URL：<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bojo/>

令和6年度新潟県病害虫発生予察情報・特殊報第1号
(モモ胴枯細菌病の初確認)

令和6年4月8日
新潟県病害虫防除所

- 1 病害名 モモ胴枯細菌病 (旧名:モモ急性枯死症)
- 2 病原菌 *Dickeya dadantii* (旧学名: *Erwinia chrysanthemi*)
- 3 作物名 もも
- 4 発生確認の経過及び国内の発生状況
 - (1) 令和5年10月に新潟県内のもも園地(品種:あかつき他)において、若木の急激な枯死及び赤褐色の樹液漏出が確認された。
 - (2) り病樹からさび症状を呈していた枝を採取し、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構において菌を分離、同定及び遺伝子解析を実施した結果、*Dickeya dadantii* を病原体とするモモ胴枯細菌病であることが判明した。
 - (3) モモ胴枯細菌病は、これまで「モモ急性枯死症」として知られており、本病が疑われる症状はこれまで本県で確認されていたが、病原菌は未同定であった。国内では令和4年に岐阜県において本病名で特殊報が発表されている。
なお、本病は糸状菌による「モモ胴枯病」とは異なる病害である。
- 5 病徴及び発生生態
 - (1) 比較的気温が高い7月~10月頃に枝幹部に発生することが多いとされる。り病部位の樹皮は淡紫黒色の水浸状となり、同部位から樹液様物が漏出する。樹液様物は乾燥するとさび色に変色し、本病の典型的な症状を呈する(図1)。
 - (2) り病部の樹皮下は腐敗褐変し、甘いアルコール発酵臭がある。り病部の上枝では、落葉を伴うことが多く、枝幹の一部又は全体が枯死に至る(図2)。
 - (3) 本病の病原菌は土壌細菌*Dickeya dadantii*で、本細菌が多く生息する地下30cm前後に細根が達する若年性の樹で発生が多く見られることから、土壌中の菌が根から侵入して感染するとされるが、本細菌が風雨による泥水の跳ね上がりなどによって、樹皮の傷口に付着して感染することも示唆されており、明確な感染経路は明らかでない。
 - (4) 本菌は、どこの土壌中にも存在する細菌であり、生育適温は約36℃と比較的高温条件下で活発に活動するとされる。本病は、ももの他、なし、りんご等で発生し、特にももでは病勢の進展が非常に早く、急速に枯死に至る場合がある。
 - (5) 本病が発生したほ場では、発生しなかったほ場と比較して、降雨後の土壌水分の低下が緩やかで、過湿状態が継続する傾向にあるとの報告がある。
- 6 防除対策
 - (1) 現在のところ、本病に登録のある農薬はない。そのため、以下の耕種的防除を実施する。
 - (2) 発病樹は速やかに伐採及び抜根し、適切に処分する。伐採に用いた器具は塩素系消毒剤などで消毒する。抜根時に脱落した残根にも病原菌が残存するとされるため、発病樹の根域では、細根にいたるまでできるだけ丁寧に残根を除去する。

- (3) 病原菌が残存した残渣の分解を促進するため、残根除去後は地温が高いうちに天地返しを行う。地温が低い 12～3月は残渣の分解がほとんど進まず、病原菌が残存する恐れがあるため、発病翌年の発病樹跡地への苗木植付けは避ける。
- (4) 樹液による感染拡大を防ぐため、せん定などに用いる器具は樹ごとに交換するか、消毒して用いる。
- (5) 台風の強風などで生じた枝幹部の傷口は、塗布剤を塗布して保護する。
- (6) キクイムシ類の食害による傷口も、本菌の感染経路となる可能性があるため、適切な防除を実施する。
- (7) 排水性の悪い園地では発病を助長するとされているため、明きょを設置するなどの排水対策を取り組み、雨水を速やかに園内から排出する。



図1 樹液様物によりさび症状を呈したもも枝



図2 り病し落葉したもも樹

(画像提供：新潟県農業総合研究所園芸研究センター)